

# 名古屋 文化情報

2014  
7・8  
July / August

No. 357  
NAGOYA  
Cultural  
Information

随想／池山 奈都子（舞台演出） 視点／名古屋のアンガラ文化・1970年前後  
この人と／石田 秀翠（華道 石田流家元） いとしのサブカル／大竹 敏之（フリーライター）



2014

7・8

July / August

Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品…………… 2  
 随想 継続は力なり…池山奈都子(舞台演出)…… 3  
 視点 名古屋のアングラ文化・1970年前後 …… 4  
 この人と… 石田秀翠(華道 石田流家元)…………… 6  
 ピックアップ 7th Cafeでアートをはなそう…………… 10  
 いとしのサブカル 大竹敏之(フリーライター)…… 11  
 おしらせ…………… 12

表紙

作品

「untitled」

(2001年/ゴム/ 240×60×60cm)

この作品は壁からつり下げられています。素材はゴム。つまりしっかりと支えられた確固とした形態というよりは、重力に従った不定形な在り様を見せています。この作品は曲線的な立体に見えますが、実は円筒形のシルエットを持つ直線的な構築物なのです。

視覚的な強さと不確定さを限りなく同居させた彫刻は可能か。このような試行からこの作品が生まれました。

伊藤 誠 (いとうまこと)

1955年 名古屋市に生まれる  
 1983年 武蔵野美術大学大学院修了  
 1996~1997年 文化庁在外研修(アイルランド)  
 2005年 第16回タカシマヤ美術賞受賞  
 現 在 武蔵野美術大学造形学部教授

「なごや文化情報」編集委員

倉知外子 (オクダ モダン ダンスクラスター副代表)  
 酒井晶代 (愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授)  
 田中由紀子 (美術批評/ライター)  
 はせひろいち (劇作家・演出家)  
 米田真理 (朝日大学経営学部准教授)  
 渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)

「2013年 名古屋市民文芸祭」  
 (第六回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部  
 俳句の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆

気がつくとき背丈が母と同じ夏

浅野 華奈子  
 名古屋市立森孝中学校3年

◆市会議長賞◆

だつびするせみきみどりに色かわる

溝口 陽菜  
 椋山女学園大学附属小学校2年

◆市教育委員会賞◆

熱帯夜百物語読もうかな

和田 涼菜  
 名古屋市立長根台小学校5年

◆市文化振興事業団賞◆

終戦日平和を願い感謝する

木野村 純輝  
 名古屋市立今池中学校1年

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆

夕焼けを見る父の目も光ってる

中島 璃七  
 幸田町立南都中学校1年

◆中日賞◆

やさしい目人なつこい奈良のしか

林 優衣  
 尾張旭市立本地原小学校6年

## 随想

## 継続は力なり



いけやま なつこ  
池山 奈都子(舞台演出)

名古屋音楽大学声楽学科卒業。全国各地においてオペラ、コンサート、合唱団の演奏会等の演出を手掛けている。平成25年度名古屋市芸術奨励賞受賞。

大学卒業後、縁あって舞台スタッフとしての道を歩き始め、30年以上が経った。30代前半まではピアノ講師や高校の非常勤講師などしながらの二足の草鞋であったが、オペラの奥深さとスタッフとしての仕事の面白さが私の仕事を舞台スタッフだけの道へと導いていった。

名古屋市文化振興事業団の企画公演の仕事は、私にたくさんの出会いときっかけをくれた。オペラ「ポーギーとベス」を演出した松本重孝氏との仕事が演出助手の楽しさと大切さを私に教えてくれ、オペレッタ「メリー・ウイドウ」を演出した宮本亜門氏との仕事が演出家への道を決断させてくれた。そして松本重孝氏が現在も私の師匠である。事業団公演に携わったのは14回、その現場での喜怒哀楽は良き思い出でもあり、スタッフとしての私の成長の血や肉となっている。当時は一週間で12回の本番があり、演劇・舞踊・音楽のジャンルが一緒に創り上げる舞台は全国でも珍しかった。そのような現場を長く経験できた事は私の脳や体に残り貴重な財産となっているので、心から感謝している。

現在の私の仕事はオペラの演出が中心である。

何百年も前に作曲された作品を現在に生かす再現芸術の一つであるオペラは愛・死・復讐・嫉妬など不変のドラマの中を生きる登場人物に今生きる私達が作品の奥を読み取り、どうやって魂を吹き込むか、どうやって生きた言葉にするか、どうやってドラマを客席に伝えるか、そうした作業を何百年もの間、あらゆる指揮者・スタッフ・歌手が繰り返して行っている音楽の一分野だと思う。作品の中の登場人物の生き方や考え方を想像?いや妄想する楽しさと面白さ、勿論、分からない事もたくさんあり、難産・産みの苦しみになる事も多々あるのだが、その創造の魅力に私ははまってしまったと言う訳だ。現在名古屋市を含め愛知県全体で、残念ながらオペラ公演の機会が少なく、歌手やスタッフの活躍の場・育成の場が限られているのが私にはとても残念でならない。

留学する事もなく、生まれ育った土地に在住し、自分に合った生き方を選択してきた私。これからもありのまま、ありのままに生きていこう。舞台演出の仕事に誇りを持ち、これからも一つ一つの舞台を今までと同じように大切に作り上げていこう。それが私自身の人生を大切に生きることだから。

## 名古屋のアングラ文化・1970年前後

昨年9月、古田一晴さんのインタビューに基づく著書『名古屋とちくさ正文館』（論創社）が上梓された。同書は40年のあいだ書店員として出版現場の最前線に立ち続けてきた古田さんによる書店論であると同時に、広く名古屋の文化的風土を語った一冊でもある。書店の仕事と学生時代から携わってきた映画や演劇の活動とを「地続き」で捉えてきたという古田さん。実験映画を中心に、一連のお仕事の出発点でもある1970年前後の名古屋のアングラ文化についてお話を伺った。（まとめ・酒井晶代）

## はじめに

冒頭から言い訳がましくなるが、聞き手である当方は1960年代半ばの生まれ。古田さんの本には60年代後半から70年代にかけて新しい映画や演劇、文学運動が盛んになり、名古屋で様々な団体や拠点が生まれた様子が紹介されているが、残念ながら当時の熱気を肌身で体験することができなかった世代である。一方でそれゆえに著書を通じて当時の状況に接し、東京発ではない、むしろ反中央集権的な名古屋発のムーブメントが次々に出現したことを知って驚いた。

古田さんが門外漢の筆者のためにと取材の場にお持ちくださったのは、ちらしやパンフレット類を綴じこんだずしりと重い数冊のファイルと『空間の祝杯 セツ寺共同スタジオとその同時代史』（1998年刊）。セツ寺共同スタジオ25周年を記念して刊行されたこの本の巻末には浜島嘉幸氏らによる「総合年表」が収録されており、1950年以降の演劇、映画、美術、舞踏・パフォーマンスの動向を一覧することができる（近日中に40年史も刊行予定）。古田さんから伺ったお話やこれらの資料類をもとに、いくつかの動きを紹介していく。



「名古屋とちくさ正文館」（論創社、2013年）表紙

## 1968年：「シアター36」オープン

シアター36は丹羽政孝氏の自宅を改築して西区浄心に誕生した名古屋初とされる小劇場で、映画や演劇などアングラ文化の拠点として注目を集めた。こけら落としは演劇「鴉の島」。1970年には東京初演メンバーも参加してミュージカル「ヘアー」が上演されたが、これは東京公演に反発した人々による公演だったという。演劇はもちろんのこと、60年代の初めから「腹這い行進」などで広く知られていた岩田信市氏らによるアングラ集団「ゼロ次元」のハプニングショー、8ミリによる実験映画の上映、講演会、コンサート等が

催され、若者たちの解放区として機能した。また活動に刺激を受けた人々や、活動を通して出会った人々が各地で上映会やサークルを結成するなど、周囲に与えた影響も見逃せない。

『朝日新聞』（1971年6月4日夕刊）は「どこへいったアングラ」という記事の中でこの劇場に集まる10代後半から20代の若者たちを取材し、次のように報じている。

「シアター36は、劇場というより、「巢」である。4年まえ、丹羽政孝君が自宅を改造してつくった。ざっと百平方メートル。／昨秋、そこで『ヘア』を公演した。せまいステージに、30人が出演。なまのバンドがはいった。ステージと客席は、フロアつづき。230人も客がはいった。ラストで、客のほとんどが、ゴーゴーを踊った。／そのあと、京都公演。みにきた名古屋の高校生10人が『ヘア』に加わった。丹羽君も演出を手伝った」

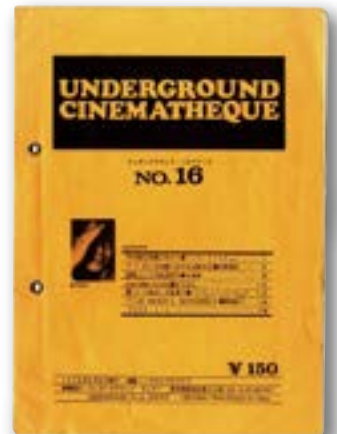


「さようならシアター36」ちらし（1973年推定）

## 1971年：TFO (THE OTHER FILM ORGANIZATION) 結成

TFOはシアター36で開催された上映会を契機として結成された映像作家集団。丹羽政孝、伊静亜伊、フィルム・シンジケート（岩田和雄、雄二兄弟）、田中満徳、橘秀麻呂の各氏らが参加し、8ミリによるプライベート・フィルムを制作。翌72年にオープンするセツ寺共同スタジオや東京の天井棧敷等で上映会を開催し、札幌、東京、大阪など各地の作家との交流も活発に行った。作風としては「ストーリーの排除、光、フォルム、色彩の追求などにより、個人的なモチーフの中で、映画のメタファーを表出」「叙情性とナイーブなやさしさの感覚が、共通した特徴と評された」（古田「名古屋派」という。

中心メンバーの一人であった伊静亜伊は「T.F.O.と名古屋における活動状



『アンダーグラウンド・シネマテーク』第16号表紙（1973年9月）

況)、『アンダーグラウンド・シネマテーク』16号、1973年9月)のなかで、「TFOの持つ属性」を9点にまとめている。そのなかから4つを紹介しよう。

「5、TFOは映画の伝播力に対して非常に楽観的であり、あらゆる人々(例えば宇宙人といえども)に接触できると考えているふしがある」  
 「6、TFOとは作家の集合であり、グループではなく各作家の作品がグローバルな形に還元できることを証明しようとする機構である」  
 「7、TFOは、文化もしくは創造力のあらゆる中央集権化を拒否し、ヨコの関係により成立している」  
 「8、TFOは、UFOと似ているが全く別物である」



「TFOフィルム・コスモロジー」上映会ポスター(1975年推定)

## 1974年：狼少年<sup>が おう</sup>牙王社、活動開始

同社はアングラ映画の企画上映や自主映画の制作を行うグループ。二村利之、浜島嘉幸、古田一晴、林昌一の各氏により結成。1974年から76年にかけて、七ツ寺共同スタジオを拠点にアングラ映画の企画上映を集中的に行った。74年には「リアニアへの旅の追憶」(ジョナス・メカス監督)をはじめ、スタン・ブラッケーやブルース・ペイリー、75年には若松孝二や高林陽一、76年には萩原朔美や大森一樹などの作品が上映記録にならぶ。

数年後には先述のTFOと合併し「シネマルームT&G」を結成。1977年末に東京のイメージ・フォーラムで「T&G新作集」と銘打ち、8ミリによる短編映画8本を上映した。この時のプログラムでは、結成されたばかりのT&Gについて中島崇氏が次のように紹介している。

「名古屋のフィルム・メーカーというと、TFOの名前がすぐに浮かんでくる。(中略)名古屋における非商業レベルの映画活動の歴史をつくる核となったことはいうまでもない」

「一方牙王社も、75年頃から活動を開始して主に定期上映の継続を目指してきた」



狼少年牙王社の自主上映会チケット

「T&Gのメンバーはそれぞれ、ブラッケーやアンガーやメカスの作品と生き方に目を向けてきた。それらの殻を越え、作品としてのよりナイーブな感性をみいだすこれらの作品群は、映画について新たな生き方を各自が追求する、第一歩となるだろう」

## 1976年：大須<sup>あんぶ</sup>実験ギャラリー AMP オープン

アーティスト・ユニオン大須派、シネマルームT&G、写真集団モグの3グループによって開設された自主ギャラリー。AMPは「Art」「Movie」「Photograph」の頭文字を組み合わせた命名であり、名称の通りそれぞれの団体が持ち回りで企画を立案した。1977年1月5日の『中日新聞』は、「『城』はできた仲間よ集まれ 新しい文化の波を」との見出しでギャラリーを取り上げ、「三グループとも、既成の概念にとらわれない“アングラ”的な活動を進めており、作品発表の場を探すのが一苦労だった。たとえ借りられても、小さな画廊で一週間6〜8万円。そのうえ『大きな物は困る』『品位を重んじて』と制約も。それだけに周囲に気兼ねなく、自由に使える“自分たちの城”の実現は、大きな喜びだ」とメンバーの声を伝えている。

1978年秋にはAMPのほか市内3会場で一作家一作品、90本以上を集中的に上映する「第1回国際実験フィルム&ビデオ展」を開催、全国から自主映画や実験映画が一堂に会する大規模な企画で注目を集めた。映像作家のみならず美術家も映像を持ち寄り、地域やジャンルを超えた交流の場になったという。



「大須実験ギャラリーAMP」オープン案内はがき(1976年)

## おわりに

当時の作品を現物確認することが難しく、ちらしや新聞記事等の情報に頼ったまとめになってしまったが、こうして見ただけでもゼロ次元をはじめ、TFOやT&Gの自主映画、AMPの企画展など当時の名古屋のアングラ文化が若者たちを中心に地域に根をおろしつつ、さらに外側へ働きかける力も持っていたことが確認できる。

映画、演劇、音楽、文学、美術…様々なジャンルが互いに越境し、影響しあった時代。古田さんのお話には多様なジャンルの方々のお名前が登場し、その数と幅の広さにただただ圧倒された。本稿で紹介できたのはそのごく一部に過ぎない。古田さん、いつかぜひ交遊録の執筆を!

### 〈参考文献〉

文中で出典を明記したものは除く。なお、掲載図版はすべて古田さんの提供。  
 古田一晴「名古屋派」(平沢剛編『アンダーグラウンド・フィルム・アーカイブス』河出書房新社、2001年)  
 『空間の祝杯 七ツ寺共同スタジオとその時代史』(七ツ寺演劇情報センター、1998年) 所収の年譜、証言、座談会など

# この人と...



華道 石田流家元

いし だ しゅう すい

## 石田秀翠さん

### 花に託して愛とロマンと感動のメッセンジャー

華道 石田流家元 石田秀翠氏が華道家として先進的な活躍をされていることは周知のことである。それに加え、愛知・名古屋の芸術文化に、長年にわたり多大な貢献をされていることを新たに知る機会となり、溢れ出てくる情熱と知識に圧倒され、インタビューの予定時刻を遥かに超え惹き込まれていた。この3月に生活文化の分野で、華道では初の愛知県芸術文化選奨文化賞を受賞された早々のところをインタビューさせて頂いた。  
(聞き手:倉知外子)

### いけばなは自然と人を繋ぐ

いけばなは、花嫁修業、家庭や床の間だけのものでないと、石田氏は二代目を襲名するとともに、芸術、文化の多分野の交流を積極的に展開し、生活芸術と銘うって活動をされ、定着させてこられた。一方、流派の組織運営の近代化を図り、今日の盤石な石田流を築きあげた。その根底には、初代家元の創流の精神が脈々と今も受け継がれている。「形にとらわれない自由で自然な作風を」と、父である初代家元が大正12年に石田流を創設、名古屋市に本部を置いた。当時、いけばなの中心は生花で、一つ一つの型の格が定まっていた自分自身の感覚で自由に構成できない様式であった。初代家元はいけばなの自由な発展を求めて、文人華（中国南宋時代の文人画の自由な自然表現）に想を得て、独特の投入型式の花を生み出した。花を師とし、花に作者の心を託すという、真に「精神的ないけばなの心」が今日も親しまれている源流となっている。二代家元はいけばな以外にも自由な発想を求め、家元個人の流派から脱皮して、いけばなを通じて社会に貢献したいと考えていた。そして、様々な事に柔軟に相對して取り込んでいく中、他

分野の芸術家達と出会い、後々の活動の原動力となっていた。石田氏の大作品にはその縦横無尽に行き交うエネルギーが表出されているといえよう。

### 石田流の淵源をたどって

石田少年は、昭和17年に華道石田流家元の長男に生まれた。10歳で初代家元入門。小学5年生の頃、風紀委員となり、校長室や来賓室に花を生ける仕事を任された。それには、前日に稽古で使ったり切り刻んだ花で生けるという条件がついていた。これは母親と学校の先生が話し合った作戦であったが、石田少年としては特に意識することもなく、宿題を持っていくのと同じ感覚であったとのこと。この頃、稽古場が空いているときに開かれていた教室で書道を熱心に習った。書はもともと好きだったが、周りが若い女性ばかりのお茶の稽古は嫌だった。石田流の跡継ぎと、はやしたてられ、はずかしく顔も上げられなかったとのこと。京都の立命館大学では日本文学科を専攻、絵画を習い、学生仲間と同人誌を発行したりもした。

さて、なぜ石田流が名古屋に本拠点を置くことになった



中学2年生のころ(先代と母)

のか。父は広島県呉市の造り酒屋の息子だった。25歳の頃、「自分のいけばなを」と青雲の志を抱いて東京へ出て勉強して、学習院同窓会の「常磐会」で教えていた。大正10年頃、郷里に戻る途中、名古屋に立ち寄り、芸どころ名古屋が好きになり、中区南武平町に石田流本部を持った。三味線、小唄もでき、女形のように踊ることもあり、芸事の好きな父であった。大正12年に大須末広町で「石田式文人瓶華投入挿法」をもとに投入花石田流を創流して、多くの人の前でデモンストレーションをよくしたとのこと。石田氏が16歳の時に父が69歳で病死した後、母の石田川翠氏が中興の祖として石田流を盛り上げ守り発展させてきた。後に愛知県知事表彰、勲五等瑞宝章受章をした。そして昭和40年二代目へと継承されて今日、在任48年に至る。



二代家元襲名式典

## 家元としての組織運営

石田流華道会は昭和44年に社団法人の認可を受け、石田流いけばな会館をつくり、法人としての組織運営がなされていくことになった。愛知県下で文化事業団体が法人



石田流いけばな会館開館

になった前例がなく、法人申請に3年を費やした。48年に石田流華道芸術専門学園を発足、56年に専門学校名古屋いけばな芸術学院に昇格した。その後、名称を専門学校国際いけばな芸術学院に変更し、現在は石田流国際いけばなアカデミーになっている。全国にいる会員の結束と交流を図るために石田流華道新聞を発行し、後の雑誌「翠」に発展し会員間の絆が確かなものとなった。

## いけばなを床の間から劇場へ

過去の石田流のいけばな展は季節の花をつかった春秋の2回で、観客は流派の門下生だけだった。石田氏はいけばなの大衆化を図るため、テーマ性や社会性を花展に採り入れた。昭和40年4月に第1回創作花展を愛知県美術館で開催した。「花とロマン」をメインテーマと位置づけ、以後は各回ごとのテーマもつけて花展を展開してきた。「花は私にとって愛でありロマン。身も心も花に溶け込み、自分が花の精になって、求めている美の感動を創造し、いけばなに託した私の夢を実現させたいという願いをこめる」と熱く語られる。その後は土と花をテーマに縄文土器やはにわをテーマにしたり、万葉集、源氏物語花絵巻、竹取物語、夕鶴、奥の細道など日本の古典文学をテーマにしてきた。昭和60年は「いけばな六華仙」で初個展。昭和61年には「シルクロードファンタジー」。この頃からその活動はエジプト、ローマ、アジアと世界に広がっていく。各界の文化人や芸術家と交流を積極的にするためにも、資料を読んで知識を得るよう努めた。また、実際に海外へ取材に出かけたり日本の美のルーツや仏教美術の由来、民族の歴史や伝統の研究など十分に事前調査をした。



いけばなショー(振付：倉知外子)

## いけばなのステージショー

テーマ展と並んで取り組んだ花の祭典は、総合舞台芸術としての表現をドラマチックにアートフルにダンスをも絡ませた舞台ショーであった。いけばなを劇場という舞台空間に活躍の場を移行し、それに相応しい舞台装置を考え、舞台機構、照明、音響、シナリオといった他ジャンルの人達との共同制作となった。石田氏は華道師匠からいけばな作家、花の演出家としての創作活動の評価を得ていった。第1回は中小企業センターで「智恵子抄」を開催。平成元年の世界デザイン博では「ザ・祭り」で1部に有名な作家、映画監督、脚本家、ピアニストの講演会、2部にステージショーを開催した。昭和60年は家元襲名、華道会結成20周年記念の「花とオーケストラ」を開催し、外山雄三氏の指揮による名古屋フィルハーモニー交響楽団と共演をした。(愛知文化講堂)ここでは、完成した作品を見せるのではなく、制作過程を音楽や舞踊とコラボしながら見せる演出をした。平成3年に大阪で行なわれた、国際花と緑の博覧会「ライブパフォーマンス花21C」なども注目を集めた。平成17年の愛・地球博での「雲海と花園」の壮大な作品は新しい造形美を見せた。平成22年のCOP10開催時には、環境問題をテーマに大作を発表し好評を得た。その他、たくさんの魅力ある作品を創作し、著書も刊行されている。



花とオーケストラの舞台(外山雄三氏と)

## 海外との交流

昭和51年に韓国釜山市のいけばな団体、社団法人水路会と姉妹提携を結んだ。交換学生を派遣したり合同芸術展を開催している。中国は南京芸術大学と平成7年にいけばな芸術友好交流協定を結んだ。他にもアメリカ、中国、フランス、ドイツ、オランダ、スペイン、ロシア、台湾、シンガポールなどで生け花パフォーマンス、いけばな展などを開催してきた。花を通じて友好を深めようというのが目的で、花と平和のメッセンジャーと思っていたし、その想いは今も変わらない。



韓国釜山国際会議場 韓国華道協会 いけばなコンテスト審査員

## 数々の受賞

昭和61年に都市文化奨励賞、平成2年には文化功労賞として愛知県知事表彰、平成5年には名古屋市長表彰を伝統文化に貢献したという理由で受賞した。昨年度の愛知県芸術文化選奨は「長年意欲的な創作研究を行い、国内外でいけばなの普及教育・作品発表をおこなっている。芸術文化の振興と向上に大きく貢献している」という受賞理由であった。このことは石田氏にとっては、長年の思いであった床の間から社会へと創造活動の実績を重ねて、芸術として評価された喜びと言えよう。

## 創作への気構え

平成14年、創流80周年の節目に開催された3回目の「石田秀翠個展」のパンフレットに現代美術に造詣が深い美術評論家はその当時の石田氏を語っている。<越境を志向する「いけばな」>と題し、「華道家としての特徴は石田流という家風を維持しつつも、その個性の表現、すなわち



独創性に大きな比重をおいていることを明確にしているところではないか。常に実験的な試みや他の芸術領域とのコラボレーションも視野においた自由な、いわば越境を志向する発想が大変魅力的なのである」と。同じパンフレットのなかで石田氏自身も「彫刻的な絵画、絵画的な彫刻、宗教的な音楽、音楽的な宗教など互いに影響しあって次の何か新しい感動的な芸術が芽生えてきたように、いけばなの世界も、もっと自由に他のジャンルとも影響しあいながら範囲をさらに広げていくことが、現代いけばなにとって大切な構えである。(略)体制の中で育てられても常に作家としては自由人であらねばならないし、芸術家は元来、自由人でなくてはならない。そして、研ぎ澄まされた感性は孤独な中からしかでてこないの、芸術家には逃げ場があってはいけない。常に孤独の中で身を削り、感性を研ぎ澄まし、飢えた獣のように腹を空かし、魂の感動を求め彷徨うのである。それは荒野を行く感動のメッセンジャーである」と。ロマンを求めて、己を厳しく律して、「魂を揺さぶる美の追求」をし続ける、石田氏の気骨をうかがえる。



2013年「古事記」より夜神楽をいける

## 文化団体のリーダーとして貢献

石田氏の豊富なジョークと気さくな人柄に多方面からの役職をと依頼があった。主なものを挙げてみる。愛知芸術文化協会（ANET）の初代理事長を5年間努め、会の組織を固め、副理事長として15年にわたり組織運営の推進をし、現在も参与として（20年在任）協会に貢献をしている。次に、中日いけばな協会では、昭和50年当時、設立準備事務局長として、60流派800名の会員をまとめ、現在は常任理事兼相談役として40年に亘る協会運営の中心的存在で、事業の活性化、東海3県下を中心に華道芸術の発展に貢献している。その他、現在は（公財）日本いけばな芸術協会評議員（39年在任）、（公財）名古屋市文化

振興事業団評議員（22年在任）、（公財）愛知県文化振興事業団理事（18年在任）など多忙な日々を過ごされている。

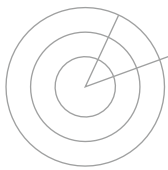
## 近年の活動とオリンピック

平成22年にロシア・クラスノヤルスクで「日本文化週間」いけばなく森の精霊たち>を開催。平成24年に石田流オープンセミナー日中国交回復40周年記念事業「日中いけばな交流史」開催。平成25年に同じくセミナー「古事記いけばなファンタジー」開催。特に最近は環境保護への思いを作品に込めている。その一方、石田氏の頭の中は、2020年の東京オリンピックに向いている。<おもてなし>の深い心をもつ日本を、いけばなを世界にアピールしたいと。おもてなしの迎え花、歓迎の花を広め、国際いけばな交流をオリンピックに広げたい。こどもや青少年などの国際こどもいけばな、学生いけばなの発表や催事など。キッズいけばな世界大会、アジアいけばな交流展など夢がいっぱいである。更にグローバル化には各国の伝統文化の交流が必要。日本のいけばなも日本だけにとどまらず、花を用いた平和な友好交流を広めたい。世界ユネスコ無形文化遺産へいけばなを育てたいと大きな大きな夢を掲げているが、まずは、いけばなオリンピックに着地点がある。自然アート・自然造形作家として世界にはばたく作家を育てたいと若々しく語った。その視線は「子どもいけばな教室」の次世代の子どもたちに向けられていた。いけばなのルーツや歴史、花と宗教、花見の文化などたくさんの資料やお話を拝聴でき、門外漢の筆者にとって発見の多い貴重な時間となった。



文化庁 伝統文化こども教室

# ピックアップ



## 7th Cafeでアートをはなそう

ナディアパーク7階にある7th Cafeは、音楽やダンスのライブなどに活用できるスペースとしても親しまれているカフェだが、ここで昨年度スタートしたトークイベント「7th deep night アートをはなそう」を紹介したい。

一般的な講演会やトークショーは、話者から参加者への一方のコミュニケーションになりがちだが、「7th deep night アートをはなそう」は話者を中心に「はなそう」というのがコンセプト。話者と参加者、参加者同士のコミュニケーションから、互いに新たな発見や学びを得ようと



マシンガントーク炸裂中の古沢和宏さん(右)

というのが狙いだ。

昨年はあいちトリエンナーレ 2013 にちなみ、『CULTIVATE 岡崎散歩 二十七曲りへの旅』著者で美術家のふるかはひでたかさんとまちの魅力のを見つけ方を考える「日常に潜むまちの魅力」、若手ギャラリストの天野智恵子さん(Ain Soph Dispatch)、竹松千華さん(GALLERY IDF)と芸術祭をきっかけにしたアートシーンの活性化について話す「芸術祭と名古屋のアートシーン」、覚王山参道ミュージアムの企画に関わるすすきめぐみさん、長者町まちなかアート発展計画代表の山田訓子さんとアートをツールにした地域づくりを考える「アートが果たす地域コミュニティづくり」が開催された。トリエンナーレとは違った視点から、名古屋のアートシーンを考える場となった。

また、1月の「金沢と名古屋のオルタナティブ」では、ファン・デ・ナゴヤ美術展 2014「虹の麓」の企画者、土方大さんが金沢の自主運営スペース、問屋まちスタジオに関わることから、北名古屋市の artist run space i/o を運営する西山弘洋さんを交えて、金沢と名古屋の



「教科書の落書きの世界～」開催の様子

アートシーンや若手の活動について話された。

なかでも『痕跡本のすすめ』著者で古書店主&ギャラリオーナーの古沢和宏さんを迎えて2月に行われた「教科書の落書きの世界～あなたの人生は、すべて教科書の落書きに描かれている～」では、教科書の落書きに自分のルーツを見出せることや、あらためて見返すと新たな気づき生まれることなどが、古沢さんが使っていた教科書を実際に見せながら語られた。「パラパラ漫画を描いていた」「勉強家と思われたくて、アンダーラインを引きまくっていた」と参加者が自身の落書きを語るなか、「同じ教科書を横並びにしてみると、個人史だけでなく、時代性や地域性が浮かび上がってくるのでは?」という意見も飛び出した。ここで交わされた意見やアイデアは、今後の古沢さんの活動にフィードバックされることだろう。

今年度も予定されているので、ディープな夜を楽しんでみてはいかがだろうか。(問い合わせ/名古屋市青少年文化センター 052-265-2088) (T)



「金沢と名古屋のオルタナティブ」チラシ

# いとしの サブカル

## コンクリート像を 作りまくった浅野祥雲は 本当に“B級”なのか？

大竹 敏之（おおたけ としゆき）

名古屋在住のフリーライター。雑誌、新聞、Webなどに名古屋情報を発信。著書に『名古屋の喫茶店』『続・名古屋の喫茶店』『名古屋の居酒屋』『東海珍名所九十九ヶ所巡り』などがある。“日本唯一の浅野祥雲研究家”を自称し、現在本邦初となる本格的な祥雲図録の発刊に向けて鋭意制作中。

B級スポットファンやサブカル好きの間ではちょっとは知られた存在である「浅野祥雲」。昭和初期から40年代にかけて、名古屋を拠点に無数の鉄筋コンクリート製塑像を作りまくった彫刻家である。

五色園（日進市）、桃太郎神社（犬山市）、関ヶ原ウォーランド（岐阜県関ヶ原町）が代表的なスポット。等身大かそれ以上のデカさ、ペンキによるド派手なカラーリング、躍動的で時にユーモラスなポージングが特徴で、見る者に強烈なインパクトを与える。

私はそんな浅野祥雲の作品やスポットを長らく“キチュで面白おかしいモノ”として観てきた。しかし、多くの作品を目にするうちに、その先入観に徐々に疑問を抱くようになっていった。先の3施設以外の祥雲作品は、戦没軍人や地域の名士をモデルにしたものや弘法大師や観音など、ごくノーマルな肖像彫刻や仏像がほとんど。茶色など単色の作品が大半で、寺社の境内などに違和感なく収まっている。熱田神宮横の円通寺にそびえ立つ毘沙門天などは、それはもう見事な堂々たる仏像彫刻だ。

さらに時代背景や仏像の在り方などと照らし合わせていくと、「B級」というレッテルはますます大いなる誤解

であることが明らかになってきた。昭和の時代は信仰が観光のメジャーコンテンツで、祥雲スポットもそんな時代性に即していた。コンクリートは建築業界で急速に普及していた新素材で、これに鉄筋を芯にして盛りつける工法は、奈良時代まで仏像の主流だった塑像作りを現代の素材で蘇らせたものだと言える。極彩色の塗装にしても、阿修羅像や東大寺の大仏ももともとはそうであったように、仏像本来の姿として決しておかしなものではないのである。

しかし、トレンドイだったかゆえに流行り廃りが激しい観光の世界ではやがて時代遅れとなり、なまじ信仰の意味もこめられているがゆえにおいそれと取り壊すわけにもいかず、おまけに大量の屋外展示のためにメンテが劣化に追いつかなくなっていく。創建当時の華やかさや思いは忘れ去られ、パッと見の印象だけで珍奇なモノとしか見られなくなってしまったのだ。

時代に取り残され朽ち行くままの作品群を自分たちの手で守っていくことはできないか。そんな思いで5年前に立ち上げたのが「浅野祥雲作品再生プロジェクト」である。活動は既に10回を数え、五色園と桃太郎神社で計100体以上を修復してきた。祥雲のご遺族が営む塗装店に監督してもらうことで素人でも作業できるようにし、全国のマニアから近所のチビっ子まで毎回約100人がボランティアとして参加してくれている。

プロジェクトの目的は浅野祥雲を美術や文化として認めさせることではない。B級と面白がっているのは表層しか見ていないのではないのか？お上がお墨付きを与えたものだけが価値があり遺していくべきものなのか？芸術とは文化とはB級とは・・・、浅野祥雲を通して、自らの固定観念を揺さぶられてほしいのだ。



修復活動は半年に1回開催。2日間で10体前後を修復する。

# 金山ぐるりタイムトンネル2014



期間／平成26年8月5日(火)～7日(木)

場所／日本特殊陶業市民会館、金山南ビル(1階インターコモン、14階名古屋都市センター)  
金山総合駅連絡通路橋、アスナル金山

「トンネルをぬけた先は、江戸時代!」

約400年前の江戸時代、人々はどんな暮らしをしていたんだろう?  
現代とのちがいを知ることで、私たちの「まち」がもっと違って見えるかもしれません。  
「金山ぐるりタイムトンネル」では、金山の「まち」を舞台に、  
江戸の知恵と仕掛けがいっぱいの遊びを用意してみなさんを待っています。

**名フィル♪  
歴史ふれあいコンサート  
～江戸時代篇～**

時は江戸時代、その頃ヨーロッパで生まれた名曲たち。はち丸やグラスピアー、名古屋おもてなし武将隊と一緒にクラシックを鑑賞しませんか?

- 日時／平成26年8月5日(火)  
午後1時00分～  
(午後0時15分開場)
- 場所／日本特殊陶業市民会館  
フォレストホール
- 料金／全指定席1,500円

**野村萬斎の  
「狂言であそぼ」**

狂言師としてはもちろん映画や現代劇でも大活躍の野村萬斎さんと、大人も子どもも楽しく狂言を体験する公演です。

- 日時／平成26年8月5日(火)  
午後5時00分～  
(午後4時15分開場)
- 場所／日本特殊陶業市民会館  
ピレージホール
- 料金／全指定席2,000円

**アート長屋**

現在活躍中のアーティストが、子どもたちとアート茶会を開き、妖怪の音を創ったり…と江戸時代の文化や伝統と融合した新感覚のワークショップです。金山のまちかどに出現した江戸と現代のコラボレーションに参加してみませんか。

- 日程／平成26年  
8月5日(火)～7日(木)
- 場所／日本特殊陶業市民会館会議室、  
名古屋都市センター会議室など

アニメーション作家の山村浩二さん、美術作家の深堀隆介さん他、全17アーティスト  
その他、当日誰でも参加できる江戸の遊び体験もたくさん用意しています!



主催：なごや子どもまちかど文化プロジェクト実行委員会  
(構成団体／名古屋市、公益財団法人名古屋市文化振興事業団、公益財団法人名古屋まちづくり公社、中日新聞社)  
後援：名古屋市教育委員会  
監修：前田ちま子(名古屋芸術大学教授)  
お問い合わせ：なごや子どもまちかど文化プロジェクト実行委員会事務局(名古屋市文化振興事業団内) TEL:052-249-9387 FAX:052-249-9386

公演のチケット取扱いや、「アート長屋」の申し込み方法など詳しくはホームページをご覧ください。 <http://www.time-tunnel.org>

一味違う印刷をお探しのあなた!  
箔印刷は押してましたが、今は

**箔がっつくんです!!**  
(コールドフォイル印刷)

**鬼頭印刷株式会社**  
Tel.052-681-1701 Fax.052-679-1171  
data@kito-net.com www.kito-net.com  
〒456-0073 名古屋市中区熱田区千代田町3-22

- コールドフォイル印刷
- フォログラム転写印刷
- UVオフセット印刷
- バリアブル(可変データ)印刷
- オフセット印刷
- Mac、Win、DTPデータ作成
- B倍プロッター出力

**舞台映像専科**

ステージの感動を格調高い映像で追求します。  
ハイビジョンで撮影し  
ブルーレイディスクでお渡しします。

**ビデオソフトの企画制作**

**エーワン・ビデオ・システム**  
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

*We make you move*

舞台音響/映像設備 舞臺照明・設計・施工・保守・特設品制作

**株式会社エーアンドブイ**  
〒464-0846 愛知県名古屋市中区千種区城木町二丁目80  
TEL 052-761-5400 FAX 052-761-0909

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

**ナゴヤ劇場ジャーナル**

◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。  
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

**MP MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ**  
〒464-0850 愛知県名古屋市中区千種区今池1-14-11 CASA LUZ302  
TEL (052) 735-3151 FAX (052) 735-3152 E-mail: mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

**業務内容**

- ①舞台の企画・制作マネージメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営